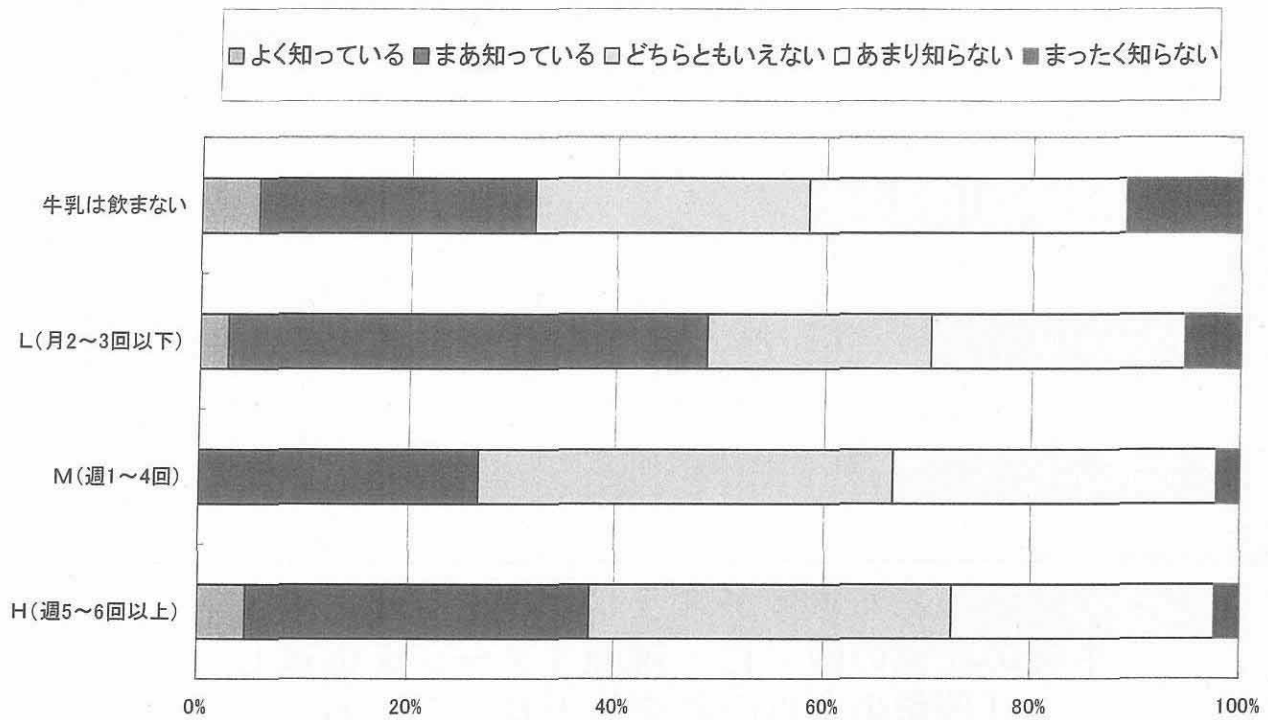


中高生の牛乳の成分や効能に対する認知度



みんなが牛乳は飲んだ方が良いと思っている。

牛乳を飲む層も飲まない層も、好きな人も嫌いな人も、牛乳を「飲んだ方が良い」と思っている。

Hユーザの声

飲むと身体が元気になる。身体の調子もよくなる。元気の素

健康や、身体を丈夫にするためには欠かせないもの

飲まないなんて言っていると背は伸びず、不健康な人間になってしまう

飲むとシャッキリする。背が伸びそう、骨も丈夫になる。嫌いな人がいるのが分からない

Mユーザの声

牛乳がとても好き。どんな食べ物にも合う。身体を作る栄養素が大量に入っているから

①背が高くなる②健康で骨が丈夫になる③寒い時に身体が温まる。再び陸上を始めたなら健康づくりのためにも、また飲みたい

様々な栄養素を含んでいて、成長していく上で必要。飲みやすい健康ドリンクのようなもの

飲むと落ち着くだけでなく、身体にもいい。Caが入っていて、骨を丈夫にしてくれる

Lユーザの声

喉が渇いた時に飲む「飲み物」ではなくて、むしろ背が伸びるための「薬」的存在

飲めば身体にいい、しかし飲みすぎると、お腹にくる。あまり好きじゃない

飲めば骨も身体も丈夫になることは分かっているが、小学校時代のトラウマが克服できない

飲むと大きくなって栄養分が多くて怪我がなさそう。そのまま飲むと臭くて嫌い

Nユーザの声

栄養素的に、カルシウムで飲まないといらいらしたり、身体に害が出る

確かに牛乳は健康に良い。カルシウムは豊富だし、乳製品になるととてもおいしい。

牛乳を中心とした生活に変えると身体にもよさそう。健康によいし背も高くなるかもしれない

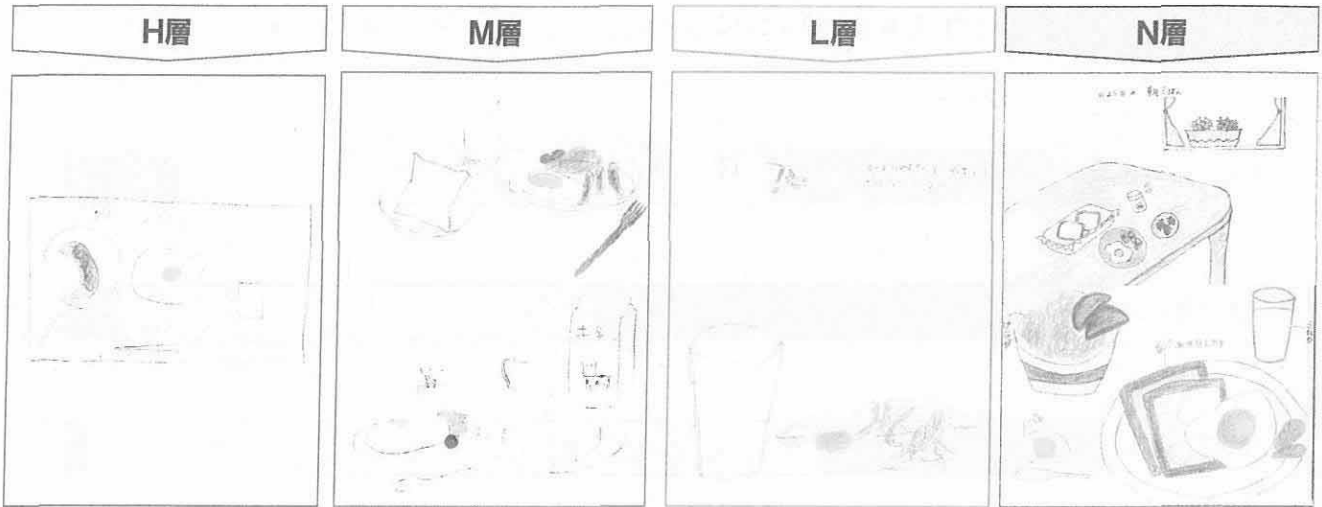
背の成長が止まったことや、将来の骨粗しょう症のことを考えると飲まないといけな

(定性調査：中高生のエッセイに見る牛乳のパーセプションより)

牛乳は「理想の食卓の象徴」

多くが「牛乳＝朝食」を連想。量層、性別・中学高校を問わずその内容が、「牛乳＋タマゴ料理＋トーストなどのパン」。

(定性調査：中高生の描画法に見る牛乳の潜在イメージより)



牛乳のある風景がステレオタイプとなり、牛乳の記憶の画一化・規範イメージを促進し、「理想の食卓の象徴」となっている。

牛乳は規範的な飲料として存在している。

牛乳は「摂るべきもの」「摂ることが望ましいもの」であり、それがおかれる社会的文脈は「理想の朝食」のような必ずしも現実に即していない理想態や、「学校給食」のような義務的な摂取が相応しいものとされている。牛乳のこの規範性はきわめて強力で、実際には牛乳を余り飲まない層の意識をも支配している。「牛乳についてのポストモダン調査分析」(若林幹夫早稲田大学教授)より

牛乳の規範性の光の部分。

規範性の強み

「飲むべきキモチ」が「背が伸びる」などの効能認知に後押しされ、安心して飲む理由(飲む確信)となる。

牛乳の規範性の影の部分。

規範性の弱み

「飲むべきキモチ」が「義務や強制」に捉えられ、その呪縛から逃れるために、無自覚に、「牛乳を意識すること」自体から遠ざかる。